

浮舟入水の脇役たち

——「東屋」から「浮舟」へ構想の変化を追って——

野村倫子

序

浮舟の入水については、素材としての源流をたどる試みが先学によってなされている。『万葉集』の処女入水の歌と説話の接点を検討した林田孝和氏は、「浮舟」との直接関係を認定しがたいと結論づける。また、舞台となった宇治について、記紀の応神天皇条以下の記事および『古今集』の橘姫を詠んだ歌などを検証した吉海直人氏も、時代による素材の変容を確認したにとどまる。つまり、いわゆる古代の処女入水伝説が記録された時代と、「浮舟」が執筆された時代の生活および文化の距離が、あらためて問われることになろう。かろうじて、平安初期・中期の諸作品の中から、表現としての「身を投ぐ」系譜をたどったのが、森下純昭氏である。先述の『万葉集』が、ある種の説話めいたものを背後に擁するのに対し、森下氏の提示した資料は、和歌の表現に重点

をおく。そして、それらの表現から、「十世紀から十一世紀にかけての頃は投身に纏わる話への関心が極めて高かった」と推定する。しかし、たとえ「歌語り」^④として伝承的にあるいは物語的に投身する話が口頭で語られていたにせよ、和歌表現に「身を投ぐ」例がみとめられることと、一箇の物語の素材として、読者の共感を得ることは別の次元である。さらに、身を投じた女性に対する読者の共感を得ることは困難をともなう。それだけに、物語作者には作品が成立した時代の貴族女性の実相と物語世界の異和感を拭触することが要求されよう。浮舟の構想が成立した時期について、私はまだ自身の論をもたないが、田舎育ちの腹違いの妹の存在を中君が語った「宿木」以降、浮舟の入水を読者に納得させるさまざまな表現手法がとられる。もちろん、その第一は浮舟の設定にある。しかし、いくら鄙育ちとはいえ、物語の主人公の位置にあり、都の文化圏に組み入れられた以上、口承などによる昔話の女のような入水を読者は納得しなかつたであろうと推

測される。そこで、女主人公を入水に導く者として、脇役の女房たち（右近と侍従）に比重がかかったと思われる。すでに、藤村潔氏の「右近と侍従」で、この二人の女房の役割についての問題提起がなされているが、氏は中君と浮舟の役割の変更に重点を置いている。しかし、本論はあくまでも浮舟入水の経緯のなかで、二人の女房の役割の矛盾を整理することによって、読者を意識した、作者の構想の変化を物語の展開にそって明確にしてみたい。

一 侍 従——「東屋」の継承

1 二人の女房、右近と侍従は必ずしも同時に登場しているわけではない。この二人の行為や思考が、匂宮や薫を包含する形で二極対立した構図をみせるのは「浮舟」後半になってからである。浮舟が登場した段階では、侍従と右近の浮舟入水への関与のし方は、まったく異なっていると思われる。つまり、この二人の女房の役割が、「東屋」では軽かったものが、「浮舟」では物語展開の主導権を握るにいたったと、存在の意味に変質が認められるのである。

『源氏物語』には同名異人が多い。官位の昇進による男たちの呼称の変化とは別に、女性、特に女房に同称の異人が多い。その中でも、特に「侍従」と呼ばれる女房は群をぬいて多い。「絵合」に登場する内裏女房の侍従命婦をのぞき、次の六人を数える。た

だし、女三宮の乳母は侍従乳母の称の他に中納言乳母と同一かとする解釈があり、やや問題を残す。

末摘花侍従	乳母子	主人をすてて九州下向（末摘花・蓬生）
雲居雁付（小）侍従	乳母子	恋の仲立ち（乙女）
女三宮付（小）侍従	御乳母子	恋の仲立ち（若菜上・下・柏木） ・病没（橋姫）
女三宮乳母侍従乳母	乳母・お乳主	（中納言乳母之）（若菜上）
浮舟侍従	よそ人	成婚に同行（東屋）・恋の仲立（浮舟）・浮舟生前を語る（蜻蛉）
小野の妹尼付侍従	?	「わが人にしたりける」存在（手習）

末摘花・雲居雁・女三宮のそれぞれに仕える侍従は、すべて乳母子という点で共通している。また、恋の手引者としての性格も、わずかながら共通しているようである。本稿で問題としている浮舟付の侍従は「蜻蛉」にいたって「よそ人」と明記されているが、浮舟の入水以前の記事には出自が記載されていない。この「よそ人」の定義は、むしろ、後になって付加されたとも解しうる。そこで、本文の展開にそって、侍従の役割を確認する。

2

「東屋」の末部で薫は三条の屋から浮舟を連れ出して、そのまま宇治にむかう。具体的な婚儀の記述はないが、この宇治行きをもって二人の結婚が成立したといえよう。その三条の屋の場面に

次のようにある。

(薰は) かき抱きて、(浮舟を車に) 乗せ給ひつ。(中略)

「一人一人や、侍るべき」

との給へば、この君に添ひたる侍従と、乗りぬ。乳母、尼君の供なりし童なども、おかれて、いと、怪しき心地して、居たり。(岩波古典文学大系『源氏物語五』による。一九二二—一九二三年。以下、本文引用は同書により、適宜、こゝを補った。)

玉上琢弥氏は『源氏物語評釈』の評釈部分で同様の場面、つまり女君が男に連れ出される場合に行同する女房として、「夕顔」の右近、「若紫」の少納言を提示する。玉上氏はこれらの例の総括として「最少限度一人はつれてゆくのだ」とする。しかし、この「一人」は女君にとって最も親しい関係にある人物に限定されているのではないか。夕顔付の右近は乳母子であり、主人の没後、光源氏に女主人の素性や境涯を語りうる立場にあった。また、若紫の供をした少納言は乳母であり、姫の父の式部卿宮に対して、姫の行動の全責任を負う存在であった。『源氏物語』に限らず、その他の作品にも、隠し妻的な女性の結婚に侍女一人が行同する例はある。人物は不明であるが、『和泉式部日記』十二月十八日条に、「例はかくものたまはせぬを、もしやがてと思すにやとて、

人一人あて行く」とある。和泉式部が宮邸に伴われる条である。この宇治行きに侍従という浮舟付きの第一の女房が行同したことは、成婚の事実を確認するだけにとどまらない。一つ車の薰と浮舟の心理が描出されない反面、舟の尼と侍従の心中の対立とも

浮舟入水の脇役たち

いうべきものが、三条から宇治への道程に顕在化してくる。忌月とされる九月に二人が結ばれたことを危ぶみながらも、舟の尼と侍従が、薰と浮舟に従う。舟の尼は薰の思い人であった故大君に仕えたこともある。そして、車中で浮舟を眼前に置いて大君を追想する。

尼君は、いと、はしたなく思ゆるにつけても、「故姫君の、御ともにこそ、かやうにても、見たてまつりつべかりしか。あり経れば、思ひかけぬ事を見るかな」と、悲しう思えて、つゝむとすれど、うちひそみつゝ泣く。(一九二二—一九三頁)

この舟の尼の大君思慕は、のちの薰の独詠「形見ぞと見るにつけては朝露の

ところせきまで濡るゝ袖かな

(一九三頁)

と呼応する。つまり、発言こそしないが、舟の尼は、やや否定的な形で、浮舟を大君の形身として眺めているのである。それに対して浮舟付きの侍従は、どう描出されてゆくか。まず、薰に対する手離しの讃辞が示される。

若き人は、いと、ほのかに見たてまつりて、めで聞えて、すゝろに恋ひたてまつるに、世の中のつゝましさも思はず。(一九二頁)

薰に対する賛同の念が強烈なだけに、薰に添う舟の尼に対して反感を示す。

侍従は、「いと憎く、物の初めに、かたち異にて乗り添ひたるをだに、思ふに、なぞや。かく、いやめなる」と、憎く、

をこに思ふ。「老いたる者は、すゞろに、涙もろにある物ぞ」と、おろそかに、うち思ふなりけり。(一九三頁)

つまり、異形の者(尼姿)が結婚しようとする二人につき従い、さらに忌まわしい涙まで流す、と心中で批難しているのである。先述の薫の独詠に対して「いとゞ、しぼるばかり」に泣く尼姿にも、同様に「見苦し」と判じる。そして、この無言の対立は、侍従側からの結論としての「むつかしき事添ひたる心ぢず」という一言で終る。

浮舟は侍従ほども露骨な感情を示していない。牛車に同乗した四人のうち、侍従が、最も激しい嫌悪感を示す。舟の尼の大君思慕が薫の大君思慕と重なっていることにまで気付いてはいなかったであろうが、九月の成婚と突然の宇治行きの状況のなかで、薫と浮舟をめぐる不調和を読者に認識させるには十分であった。

3

浮舟を伴った牛車は宇治に着いた。故八宮邸、つまり薫にとつては故大君との思い出の場である。薫はそこに故大君の代りに浮舟を据えることで、果たせなかった思いを実現しようともくろむ。

(宇治に)おはし着きて、「あはれ、亡き魂や、やどりて、見給ふらむ。誰によりて、かく、すゞろに、惑ひありく物にもあらなくに」と、思ひ続け給ひて、おりては、少し心しらひて(浮舟より)立ち去り給へり。(一九四頁)

今なお、この邸に故大君の存在を意識する。それから、徐々に、

浮舟と故大君の比較が連ねられる。浮舟にとっては「色／＼に、よく」と思われた着物も、薫にとっては「昔の、いと、なえはみたりし御姿の、あてに、なまめかしかりしのみ」を喚起するにとどまる。ただ、浮舟の髪的美しさは、薫にも認められる。外見の比較を終えて、父の故八宮の話から、浮舟の教養へと話が転じる。やや、教養が劣るかと思感して、薫は「教へつゝも見てん」と考える。かつて光源氏が若紫を二条院に連れ出した時、不確かながらもその行末に期待をかけ、理想の女性に育て上げた前例がある。しかし、物語は読者の期待を覆してゆく。額際感じが大君に似ていると薫に思わせ、期待を抱かせながら、浮舟の無教養が一気に提示される。ここで侍従は、主人の無教養の表出のために存在したといえよう。

「これは、少し、ほのめかい給ひたりや。「あはれ、わが妻」と言ふ琴は、さりとも、手ならし給ひけむ」

など、問ひ給ふ。

「その、大和言葉だに、つきなくならひにたれば、まして、これは」

と、いふ。

(中略)

琴は、おしやりて、

「楚王の台の上の、夜の琴の声」

と誦し給へるも、かの、弓をのみ引くあたりにならひて、「いと、めでたく、思ふやうなり」と侍従も、聞き居たりけり。

さるは、扇の色も心おきつべき、閨のいにしへを知らねば、ひとへに、めで聞ゆるぞ、おくれたるなめるかし。

(一九六一—一九七頁)

當時の貴族女性の教養については、『枕草子』二十三段にある小一条左大臣の言が有名である。

『ひとつには御手をならひ給へ。つぎにはきんの御琴を、人よりことにひきまさらんとおぼせ。さては古今の歌二十巻をみなうかべさせ給ふを御学問にはせさせ給へ』

習字・琴・歌を必須と言いうるなら、浮舟は、少なくとも琴と和歌については失格となる。せつかく勧められた琴に、浮舟は手も触れずに終ってしまう。薫は、その琴の連想で、一句を誦じた。愛を失った女の詩。詩の表面の意味は、浮舟にも侍従にも理解できる。しかし、その朗詠の素材にまで気付かないところに、「かの、弓をのみ引くあたりにならひて」と、田舎育ちであることが強調される。「侍従も」と遠廻してはあるが、この侍従と無教養の点で同等に示されているのは浮舟である。

浮舟にとっては第一の側近である侍従すら、この程度の教養しかない、と読者は再確認する。いくら地方宮の後妻となった母とともに常陸まで下向したとはいえ、浮舟は、物語の女主人公的地位に定まりつつある。そのため、浮舟当人が読者から（あるいは都人の概念から）拒絶されてはならない。そのためにも、侍従は成婚の場に必要であった。常陸の受領階級程度の育ちの教養と、中央権門貴族のごく日常的な教養の落差が、侍従を介すること、

浮舟入水の脇役たち

浮舟本人を傷つけず、しかも読者に明瞭に印象づけられたと言えよう。

4

さて、侍従は「浮舟」巻では存在意義が後退する。前半部は、次章でとりあげる右近の一人舞台であって、巻の中核となる匂宮と浮舟の宇治川遊びの場面でようやく再登場する。それまで、一人で匂宮との関係をとりもっていた右近が協力者を必要とした時に、侍従が仲間にはきき入れられる。

侍従も、いと目安き若人なりけり。(中略) 宮も、「これは、また、誰ぞ。わが名、漏らすなよ。」

と、口がため給ふを、「いと、めでたし」と、思ひ聞えたり。

(二三八頁)

侍従は、「東屋」で薫と初対面の時にも、「めで聞えて、すゞろに恋ひたてまつ」っている。田舎育ちで、都の貴公子とみると、すぐに熱中することは、のちに浮舟に対する言葉の中で自弁している。

とのゝ御かたちを「たぐひ、おはしまさじ」と、見しかど、この御有様は、いみじかりけり。うち乱れ給へる愛敬よ。まろならば、かばかりの御思ひを、見る／＼、え、かくてあらじ。きさいの宮にも参りて、つねに見たてまつりてむ。

(二四三頁)

つまり、先に出会ったのが薫であったので心をひかれたが、匂宮

二一 右近——「浮舟」巻の展開

と会ってみると、もう薫の比ではないと告白している。この匂宮称賛の前には「色めかしき」心から、匂の付き人の大夫とも、交際を深めている。この大夫も含めて、以降の侍従は匂宮一辺倒になり、もう一人の女房の右近と対立してゆくようになる。

では、何故、「浮舟」で再登場して以降の侍従が匂宮びいきとなり、「浮舟」前半部ではまったく描出されなかったのか。1で触れたように、侍従の名を有する何人かは恋の手引者であった。

しかも、侍従が手引きした段階では恋愛が成就せず破綻に終るか、のちに侍従とは無関係に二人が結ばれるという共通点すら有している。浮舟付の侍従の「色めかし」さも、「東屋」の段階で、すでに匂宮を浮舟のもとに手引する者として予定されていた名残りと思われる。しかし、実際に「浮舟」で匂宮と直接、関わりをもちはじめたのは右近であり、侍従は右近一人で二人の仲を隠しきれなくなつてから再登場する。侍従の役割が一次的に右近に代つただけにすぎないとはいえない。しかし、二人の女房が対立する存在として物語が展開してからは、単なる手引者であったかかなかつたかという次元を離れて、浮舟の入水に照準を絞っている。そして、この侍従の役割の後退は、右近との関係を整理することで、浮舟入水の主題とも相関する重要な意味をもつことが確認されよう。この点について、二の右近との関係で述べる。

「右近」ほど何度も個有名詞を明示される人物は他にない。以下、主な箇所だけを掲げて左のようになる。

- ・ 匂宮の侵入(二二三—二二六頁)13ヶ所
- ・ 匂宮の文を受取る(二三〇頁)自称を含めて2ヶ所
- ・ 宇治川遊びの留守をあずかる(二三五—二四二頁)6ヶ所
- ・ 再び匂宮の文を受ける(二四三頁)2ヶ所
- ・ 匂宮の宇治来訪から右近の姉の話まで(二五九—二七四頁)自称を含めて10ヶ所

もちろん、ほとんどが行為の主体者としての「右近」の明示であるが、自称のほかにも本人以外のものにも関わって、例えば「右近が姉」といった表現まで含んでいる。特に、匂宮が宇治を訪れて透見をした時には、縫い物の片付けにおわれ、眠気におそわれていることを言いながら邸内を動きまわる右近の行動の一端が確認されているといつても、過言ではない。その一つ一つの行動の集積から、思わずに右近が匂宮を浮舟の寝所に導く行為が不自然でなくなる。

匂宮の侵入以降の部分についても、大まかに解釈を加えて右近の行動をまとめるならば、匂宮と浮舟を結ぶ役割としていかに右近が重要であったかということと、また、いかに二人の逢瀬や文

の贈答を穩密裡に運んだかといふことの二点につきる。教例をあげてみる。

右近、「人に知らすまじうは、いかゞは、たばかるべき」と、わりなう思ゆ

よろづ、右近ぞ、空言を、しならひける。

右近は、よろづに、例の、言ひ紛らはして、御衣など、たてまつりたり。

そして、右近の名の確認を繰り返す場面の中で、最も浮舟入水と直接的な關係を有するのが、薫から匂宮の存在を知っていることを暗示した文をのぞき見した箇所であろう。結果的に、右近が文を盗み読んで語ったとも知らずに、すでに自分の行為が都人に知れたつたと誤認した浮舟が入水に思い至る。冒頭に戻って、右近の名前の確認は、いわば、女主人浮舟をばかしてしまふことにある。いかに浮舟が田舎育ちであり、薫の訪れが絶間がちとはいえ、匂宮と一夜を共にして翌朝まで気付かないというようなことは物語の女主人公としては立場が苦しい。その浮舟の立場が物語の主人公として距離があるだけに、その距離を緩和するためにことさら右近の行為の一々がくだくだしいまでに描写されたのであるまいかと推測される。そして、浮舟の田舎人らしさを隠して、都の姫君たちの立場に少しでも近く見せようとする右近の行為の確認は、「東屋」末部の侍従の無教養を前面に押し出して浮舟自身の教養の程度をさりげなく隠した手法とまさに同一といえよう。

2

右近の役割については、今ひとつ、姉の物語をすることにある。『大和物語』所収の生田川伝説に類似した、姉の三角關係の話が浮舟入水の決意に働きかけていることは明白である。鈴木日出男氏以下が、右近の姉の悲恋譚と説話の構図および、それらと浮舟入水の相關關係の整理をしている。本論においては、その姉の身上話の告白の意味もさることながら、その話を、ことさら浮舟に語るのではなく、侍従に話していることに注目したい。侍従に長話をきかせた上で、浮舟に、薫と匂宮のいずれの招きに応じるのかを問う。右近は「方へもと言ひ、侍従は「宮を、いみじくめで聞ゆる心なれば、ひたみちに」宮を支持する。

かつて、匂宮を薫と誤認して寢所に導いた右近は、それを「御宿世にこそありけれ」と自分を納得させた。今度は、事極まって侍従が、匂宮との仲を「宿世」だと迫る。右近と侍従は、「宇治川」の条を境に、立場が逆転していく。薫びいきの侍従が匂宮びいきになり、二人の仲を宿世とまで言いきる。それに対して右近は、自分の誤ちを「御宿世」の一言で一旦は納得させたものの、徐々に用心深くなり、薫に一件が知れたと察知して以降は、浮舟に匂宮のことを「いひきりつるよし」を言いわたす。

浮舟は、始終、二人の男君のそれぞれの特長をくり返し思い出しはするが、一方をよしとは決して言わない。その代りを右近と侍従がそれぞれに弁じているといえる。

単に一人の女君をめぐる二人の貴公子が対立する構図を作るのであれば、一で述べた侍従のような色好み若女房が一人いれば十分であろう。

しかし、「浮舟」では、単なる状況から思索へと物語が変質した結果、手引きの女房が二人必要になったのであろう。しかも、薫と匂宮の動静に注意すると、「宇治川遊び」以降、必ずといってよほど薫と匂宮の行動が重なって、物語が緊迫していることが明白である。二人の貴公子がほぼ同じ状況で浮舟に行動することが、浮舟の不安を昂める。しかも、その一々に対して、批評的になったり協力的になったり、絶えず物語を波立たせるのが二人の女房の役割であった。一時的には、ともに匂宮側に立っていたものが、右近がふと冷静になるように浮舟に進言した時には、すでに右近と侍従の役割は終息していたのではないか。侍従は最後まで匂宮の側にあるが、右近はことさらに薫を勧めない。状況のいき詰まりを最も端的に体现しているのが右近であろう。浮舟の思索が現実から非現実へ、急激に入水へと至るのと同じうして、右近は浮舟をつき離れた態度をとるようになる。二人の男性の間で不祥事を起こしたという右近の姉の話は、読者を口承の昔語りのような説話の世界に引きこむ。そして、この説話的昔話を経験談として介在させることで、辺境の常陸での実話という点をさしひいても、女主人公浮舟の入水を昔話的な事件から、いかにもありそうな話として読者に納得させるように仕組まれている。

三 二人の右近

「浮舟」で匂宮の侵入を許した「右近」が「東屋」の中君付きの「右近」と同一人か否かは、藤村潔氏が構想論と相関させた問題として提起した¹²。藤村氏の論を要約すると以下の如くである。「東屋」の中君付右近は、「浮舟」の右近と同一人物である。当初は中君を投身させるために大輔という女房を設定したが、新たに浮舟を登場させて中君の運命を移したために大輔は中君と浮舟の橋渡し役のみを果たすにとどまった。そして、新しい女君の登場に従って、この大輔の娘の右近が急拠設定された。匂宮の初度の宇治侵入の際に、宮の目にとまったのが「右近と名のりし若き人」であり、宮にとつて既知の存在であった。以後の「蜻蛉」まで、この右近は一貫して浮舟の傍にあって、入水に関与してゆく。本稿の目的に関係した部分を要約すると以上のようなになる。藤村氏のいう「主人公の投身という構想が要求した女房」であることは肯首できるが、右近が同一人物であるとする点と、素性の不分明さを大輔との母子関係にのみ求める点に疑問を残す。すでに、小山敦子氏¹³・吉岡曠氏¹⁴・待井新一氏¹⁵らの反論がある。小山氏は母子関係に言及するものの、論の主眼は浮舟入水の構想がいつ成立したかにあり、また、吉岡氏は浮舟との君の接点として大輔が不可欠であったとはいえないと婉曲な異論を唱えたにすぎない。この

二人の論があくまで右近を同一人物と認定するのに対し、待井氏は本文から三ヶ所をあげて、二つの巻に登場する右近は別人と説く。氏は、三ヶ所の例示箇所¹⁰の二番目に先述の藤村氏引用の「右近と名のりし若き人もあり」を含む部分を提示し、玉上琢弥氏の『源氏物語評釈』を援用しつつ、作者のミステークとみなしうる旨を強調する。氏の論は「手習」の浮舟出家の伏線を入水以前の物語に求めることにあり、右近の問題は副次的な位置に留まり、また、ミステークと断定することの意味と位置付けも、従来¹¹の説に一石を投じたにとどまっている。つまり、上述の三氏の論は、ともに主眼が他にあり、右近の問題はあくまで二次的な地位に甘んじている。しかし、右近こそが浮舟入水の物語を当時の説者に納得させ、後代に亜流的作品を次々と生み出させるほど「入水」を魅力的なものに仕上げ得ることに成功させた存在といえよう。そして、同時に右近の分裂したかにみえる描写は、侍従と相関して浮舟の立場を明確にし、読者に対しては浮舟の入水を認めざるをえないように導くための、作者の物語執筆の苦闘の証しといえよう。以下、右近一人の問題に限定せずに論を展開したい。

2

まず、「東屋」と「浮舟」の二つの巻に登場する右近の矛盾の所存を明確にする。一は出自について、「東屋」では中君の宇治八宮邸に出仕した大輔の女とし、「浮舟」にあっては常陸で成長した浮舟の乳母の子とする点にある。二としては、匂宮を浮舟の

浮舟入水の脇役たち

寝所に案内して以来、宮の接近を「宿世」といい、余人に秘して宮の宇治来訪に加担していた態度が、侍従の登場以降は自分の想いは黙したまま、浮舟自身に判断を迫り、匂宮に熱中する侍従とは対立するともとれる発言にまでいたる。つまり、侍従が「東屋」と「浮舟」の二巻の間で薫を愛でる立場から匂宮に熱中してゆく過程と相反して、右近は匂宮への消極的協力者の立場から非協力者へと入れ替わっている。しかも、同じ「浮舟」の記事でありながら、当初はいかにも「若き人」で落ちつきのない女房らしく描写されながら、後半に至って姉の身上話をする頃には、いかにも「色めかし」く匂宮に肩入れする侍従に比して、分別もあり将来を見通すような、ある程度の思慮を備えた存在と化する。この二点から、次のような仮説が導けよう。右近は作者の執筆の大きな変更によって、物語における役割を三転した。つまり、中君付きとしての「東屋」の右近、次いで「浮舟」前半部において浮舟付として匂宮を入れる右近、最後に侍従と対立したり或いは姉が常陸で起こした事件を語って浮舟を入水に追いこむ右近、このように三転、役割が変化するにつれて中君付のはずであったものが、途中から浮舟の乳母子へと塗り変えられた結果といえまいか。右近の変貌は、大輔との母子関係、あるいはケアレス・ミス、二人説というたものによるものではなく、浮舟の入水に照準を絞った執筆過程で、物語の発展の上で次第に矛盾を包含せざるを得なくなった結果、生じたものと考えるのである。

ところで、待井氏の二人説を改めて否定することもあわせて行

わねばならない。本稿の二の1において「浮舟」では右近の名称が強調的に確認されつつ使用されていることを述べた。ところが「東屋」の中君付きの右近に関しても同様の傾向が認められる。母に連れられて常陸から上京して間もなく、二条院内の局にあって匂宮に踏み込まれた場面、しかも、それは宮と浮舟の初対面となり、宮の脳裏に浮舟の印象が鮮やかに刻みつけられ、後々の二人の恋の伏線となる箇所である。匂宮が浮舟の局で添い伏している時、中君は洗髪の中であった。中君が身動きできない状況を設定した上で、匂宮が未知の女性に寄り伏して素性を問う時間を用意する。浮舟の乳母、さえ宮に対して激しい抵抗ができないまま夜をむかえ、そこに来あわせたのが「大輔がむすめ」の「右近」である。右近は主人の匂宮に表立って意見できない立場から、中君にそれと報告にのみ参る。右近は同じ女房の「少将と二人して、いとほしが」り、匂宮の好色を「さゝめきかはす」様子が中君の心痛を誘発する。結局、内裏からの使者の口上を、少し矮曲して急ぎの招きであるかのように言いなして、右近が匂宮を浮舟から引き離す。宮が参内したのちに中君は浮舟を招くが、浮舟は「たゞ、いと、苦しく侍り」と固持する。しかし、中君の好意を無にすることも憚りかられて乳母が右近と対面する。岩波古典文学大系本で十一頁にわたる当該箇所には、右近の名は十一回を数え、それに比して少将の名はわずか三回にすぎない。つまり、二人の女房を配しながら、右近一人の行為のみが強調され、少将は右近に同調する副次的人物に終始する。いわば少将は、右近とともに匂宮

に寄り伏された浮舟を「いとほしが」り、浮舟から対面を拒否された中君を二人して「目まじろぎ」して心中を推察する相手としてしか存在しえなかったといえよう。匂宮と浮舟の運命的な出会いを、浮舟に同情して終始行動したのが右近である。

「東屋」の右近は母子二代で中君に仕え、匂宮の好色に批判的であったといえる。この右近の活躍はこの場のみで終る。少将とともに、浮舟が匂宮にとり寵められるのを「いとほし」く思うだけにとどまっている。

さて、「浮舟」に登場する右近については二で述べたとおりである。名前の確認、つまり行為者の主体を明確にしているのが二つの巻の右近の共通点であるとすれば、矛盾点としては出自の食い違いに終始するのみである。しかし、相違をあげれば、右近の役割の変化はさらに明瞭になる。つまり、「東屋」の右近は匂宮に侵入された浮舟に対して少将ともども同情し、心を寄せる。いわば少将と右近は同じ立場で浮舟に接しているのである。しかし、「浮舟」後半では、右近と侍従は半ば対峙する形をとって、浮舟を薫側へ或いは匂宮側へと相互に引き合うモメントを構成する。つまり、匂宮と浮舟の宇治川遊びに侍従を加担させて以降、右近は単なる恋の仲立ち役から、浮舟を入水に導く役割に転じているのである。二人の女房の配置は「東屋」の踏襲と言えようが、その役割ははるかに重くなっている。

再び「浮舟」の匂宮侵入の条に戻る。ここでは、中君付の「東屋」の右近と齟齬を見出せない。匂宮の視線を通して描写される右近は、「東屋」の中君付右近の描出と酷似する。右近が固有名詞を確認して行為の主体を明示されるのに比して、浮舟にはほとんど動かしらぬものがみられない。そして、その結果、匂宮の侵入を許容した責任はすべて右近に帰される。「東屋」の末部近く、浮舟に最も近い人として宇治に同行した侍従は、匂宮の最初の訪問の際には登場しない。おそらく、二条院でかつて添い伏した女と浮舟が同一人物であることを匂宮が確信し、そのまま薫を装って邸内に入りこむ決心を固めるために、中君と宇治の女君を結ぶ人物を配する必要があるのではなからうか。そのために、この場面の右近はことさらに「東屋」の中君付の右近を髣髴させる。匂宮にとっての侍従は、浮舟と同様に未知の人物であり、「東屋」でわずかに接触のあった浮舟と宇治の女君を同一人物と確認するだけの説得力を有しないためであろう。

二月に匂宮の再訪があり、浮舟と宇治川に遊ぶ。右近一人では対処しきれず、侍従を二人に同行させたところから、侍従は匂宮の好き者ぶりに傾倒し、匂宮も侍従に好感を抱いて、「これは、また、誰ぞ。わが名、漏らすなよ」と秘密の共有を促す。侍従の側には宮に没頭する用意はされていたであろうが、宮とは面識のなかったことが、この場面でも一層明確にならう。「東屋」から

浮舟入水の脇役たち

「浮舟」の間に、年立の上からは成婚の九月以降年末までの記事を欠くが、それ以上に、筆者にとつては匂宮と薫の二人を同等に浮舟に配することが重要であつたろう。匂宮の好色だけでは宇治への侵入は説得性を欠く。二条院の暗闇の中、すぐに匂宮とは気付かずに、手探りをして傍まで寄つてから、「桂すがたなる男のいと、かうばし」いに気付いた右近と、睡魔に朦朧としていて匂宮と気付かない右近の姿が重なって、浮舟が意図しないままに二人の男君を受け入れてしまふ設定が可能になる。ところが、宇治川遊び以降は、右近と匂宮を強紐に結ぶ必要性がなくなる。浮舟は橋の小島を通過した時に、わが身が敢果なく消える予兆を孕んだ一首を詠む^⑩。その後の「ながめの頃」の文使い以下、匂宮と薫の行動は並記され、ついに匂宮と浮舟の文の交換を薫に知られるにいたる。匂宮との交渉が露顕して以降の記事は、匂宮の行動に一方的な比重が加わる。そして、右近と侍従も宮の動静にあわせて浮舟に迫る。記事のテンポが急速度に転じる。「ながめの頃」の贈答のあたりで、唐突に二条院の右近の名がみえる。浮舟の母と舟の尼の対話中、しかも、右近の名は直接に明示しない。「大輔がむすめ」と出自で呼び、醜化はしているが、この一言があるために、「浮舟」の右近はすべて「東屋」の右近と別人であると錯覚させられたのではないか。実際、薫からの咎めの文を盗み見たのちの右近は、浮舟の乳母の子として、姉の常陸での不幸を問わず語りをして、浮舟に対して匂宮か薫かの選択の決断を迫る。一見して説話的ともみえる右近の話中、「まゝも、いまに恋ひ泣

き侍る」と、右近が乳母子である旨を確認している。この乳母子との意識が逆に「浮舟」の巻を通じて、すべてただ一人の右近しかいなかったかのように思わせてしまったと思われる。つまり、執筆の順序に従って人物を位置づけたのではなく、物語を通読したあとの整理された系図から逆に人物を規定し、それによって物語を読もうとしたために、種々の憶測が生じたのであろう。出自の先入観を捨てて物語の記事のとおり右近を整理すると、途中の構想の変化が、大輔の女の二条院の中君付き右近から、浮舟の乳母子の右近へと横すべりに変更されたと見るほかはない。この右近に対する侍従は、「蜻蛉」ではじめて「よそ人」と明記される。つまり、「東屋」の浮舟に最も近い存在、一見して乳母子を思わせる表記から、次第に後退し、浮舟の失跡後に特に浮舟と関わりがあったわけではない存在に位置が確定してゆく。一見、無関係にみえるかもしれないが、浮舟をめぐる二人の女房の右近と侍従の出自の確認は、浮舟の入水の決意ないしは失跡後にもちこざれている点でも共通している。つまり、二人とも、当初から確たる素性を付与されておらず、浮舟入水の物語の展開に従って流動的に操作されたと思なされる存在である。

以上のように、右近の記事は三転し、それに相関して侍従は浮舟から遠い存在になる。これは、物語の執筆にあたって、筆者の執筆構想の変化と展開によって生じたと認められよう。つまり、「宿木」において「形代」と紹介されて入水の大まかな構図を想定し、「東屋」では匂宮にも存在を知られることにより、入水

の要因を古い時代から継承された妻争いの素地を固めた。そして「浮舟」にいたって匂宮との交渉、薫と匂宮の二人の求愛とそれぞれに思惑を有した右近と侍従の存在が、浮舟という女主人の「おずかるべき」行為を当然の帰結に化す。入水という漠たる構想が煮詰まるにしたがい、女主人公の入水の決意が読者に与える衝激を緩和して納得させるための手段として、右近と侍従を駆使したといえよう。

結

右近と侍従の二人の女房の記事は矛盾に満ちている。ただし、それを指摘した藤村氏以下の諸氏は右近の素性の矛盾のみを言及してきた。しかし、もともと恋の手引者を思わせる存在であった侍従が次第に存在意義が稀薄となり、遂には「よそ人」と明記された過程と重ねると、二人の女房の役割は相関を保ちながらも浮舟の入水を目指しているとの示唆が得られる。そして右近も、物語の後方から照射するのではなく、あくまで執筆の過程にそって忠実に読みとることが必要であろう。以上の結論として、右近の記事は一見矛盾に満ちているが、それぞれの場面に密着させて読む限りは全く異和感を感じさせないことを、まず認めることである。通読して出自を云々するよりも、むしろ矛盾を有したまま、場面をその場に即して読む方が、説得性が強く、また、浮舟の入水という劇的な昂揚を支え得ると言えよう。二人の女房は物語の

屋開に不可欠の存在であり、物語の目的に応じて次々と変化していったと見るべきであろう。作者の浮舟入水の見取り図が完成度を増すのに従って、二人の女房は物語の展開の必然性によって、その都度、改変されたといえよう。そして、矛盾を孕みながらも各場面においては最大限に有効性を発揮した。いわば、浮舟の入水の物語はこの二人の女房、右近と侍従の矛盾に満ちた存在によって、その異和感や嫌悪感を読者に抱かせることなく、むしろ、後世に「いとほし」と言わせ得るだけの悲劇となりえたのである。

注① 『源氏物語の発想』二八五頁（桜楓社）

② 『源氏物語』統篇の背景——宇治の内包するイメージ——（『源氏物語研究』七号四三頁）

③ 「入水譚の系譜——「狭衣物語」を中心に——」（『中古文学』十号四七頁）

④ 『紫式部集』（九八）

「かひ沼の池といふ所なんある」と、人のあやしき歌語りするを聞きて、「心に詠まむ」といふ

世に経るに なぞかひ沼の いけらじと 思ひぞ沈む そこは知らねど
（『岩波文庫』五七頁）

⑤ 「国語と国文学」昭和三年九月号

⑥ 山岸徳平氏の岩波古典文学大系などでは、侍従乳母（中納言）——小侍従

とする。また、『源氏物語事典下』（池田亀鑑・東京堂出版）も中納言乳母と同一人とする。ただ、いずれも、同一人物と断定した根拠は説明していない。

⑦ 玉上氏は、この若紫の二条院入りを、「夕顔の巻」と「同巻」と誤記されている。

⑧ 第十一卷四五四頁（角川書店）

⑨ 「講談社文庫」七三頁

⑩ 「岩波文庫」四〇頁

⑪ 「浮舟物語試論」（『文学』16・4）に詳しい。新しいところでは、寺本直彦氏が「浮舟物語と生田川伝説」（『むらさき』十九号三三—三六頁）を発表している。

⑫ 「国語と国文学」昭和三年九月号

⑬ 『源氏物語の研究』一七一頁（風間書房）

⑭ 『源氏物語論』四〇四頁（笠間書院）

⑮ 「浮舟の復活をめぐる」（『国語と国文学』昭和五一年九月号）

⑯ 第十二卷四八頁（角川書店）

⑰ 高橋亨『源氏物語の対位法』一九四—五頁（東京大学出版会）

⑱ 『無名草子』に二回にわたって表明される。